

評価項目		具体的な手立てと指標（R5年度）	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
I	学力向上	(1)各学年、クラスの児童や実態に沿った授業・学習を行い、基礎学力の定着を図る教員100％。	（１）つけたい力を確認しながら、子どもの実態に合わせて全学年で定着を図るための取り組みを行った。	（１） ・九九の習得には、徹底して取り組む必要がある。 ・取り出し授業を可能な限り取り入れてはどうか。 ・100％？数値化が必要。	（１）各学年、最低限つけておきたい力を明確にする。子どもたちの学び合う力（ペア・グループ学習）を伸ばし、基礎学力の向上を図っていく。
		(2)「家庭学習について」や「家庭学習カレンダー」を配布し、全校で家庭学習の定着に向けて取り組む。低学年は自分から宿題に取り組んでいる児童と宿題提出率。3年生以上は宿題提出率と自主学習に取り組んでいる児童を数値で出す。	（２）学級ごとの達成率 ①宿題提出の割合67～93％ ②自分から宿題に取り組んでいる割合66～67％ ③自主学習に取り組んでいる割合24～53％ カレンダー期間の声掛けには効果があった。しかし、3年生以上は自主学習はなかなか出ずに数値が伸びない。	（２） ・宿題提出などのパーセントで表してあり、取り組み状況は視覚でよくわかるが、取り組みができなかった子に対してどのような手立てをして、その上で何が課題なのかを記載されているとわかりやすい。 ・取り組めていない子の要因把握とフォロー必要。	（２）学習に取り組めていない児童を各クラス数人ピックアップして、要因分析をする。 学習に取り組めない児童は、休み時間や放課後スクール等に少しずつフォローする。
		(3)全国学力・学習状況調査、みえスタディ・チェックの採点・分析を行い、本校の弱み、強みを明らかにし、弱みを改善するための具体手的な方策を考え実践する教員100％。特に、今年度は国語科の研究を深めていくため、いずれかの学年の国語の採点分析には全職員が携わるようにしていく。	（３）弱みの改善策を各学年で話し合い、毎学期どの単元でどんな力をつけていくべきかを考えることができた。学年で毎学期取り組むべきことを話し合い、単元でつけたい力を意識して授業することにつながった。	・宿題提出率が70％台前後は問題。	（３）来年度も教員全員で採点・分析を行い、本校の弱みを明らかにしていく。また、課題を改善するための具体的な対策を考え授業改善を行う。具体的にどの単元でどのような力をつけるのかを教材研究する。
		(4)全教科・領域で、ペア・グループ活動を取り入れ、対話によって学びが深まる授業づくりをする。また、系統立てた目標を設定し、「聴き合う力」を付けていくことを意識した授業づくりをする。	（４）どの学年でも聴く時のポイントを視覚的に示したことで、子どもたちは意識して取り組むことができた。またペア・グループを取り入れることで、粘り強く課題に取り組むことができる子どもも増えてきている。聴き合う活動の中で、学びが広がり、深まったりする姿も見られた。	・家庭学習の③自主学習に取り組んでいる割合が4年1組のみ目立って高かった。自主学習の指導が上手だったのでしょうね。	（４）来年度も「聴き合う」ことを大切にした授業づくりを研修のテーマにしていく。学びの中で、「聴き合うことができているか」「一人の子どもも独りにしない授業ができているか」を学期初めに全教員で確認する機会を設け、具体的な取り組み（改善策）を全員で考えていく。
II	ICTの活用	(5)教育指導課から出されている「授業力UP5」を活用し、「めあて・まとめ・ふり返り」の授業の流れを視覚化し、わかりやすい板書と授業を行う。	（５）「めあて」はしっかりと設定できているが、「ふり返り」をする時間を授業時間内に確保することが難しかった。また、ふり返りに書く内容が、感想等に止まってしまうよう、何をどのように書くのかの指導も必要である。たんぼぼタイム（特別支援学級）では、授業の流れを示し、かんたんふり返りを行うことができた。また、めあてを意識して課題に取り組むことができるようにもなっている。	（３）昨年度より良い結果になり素晴らしいです。これからますます学習能力が上がることを期待します。	（５）来年度も引き続き意識して取り組んでいく。ふりかえりの書かせ方を研修会などで確認しておきたい。
		(6)2023授業規律の定着の徹底を図る。月に一度、チェックシートで実態の確認をする。（できている児童90％以上）	（６）生活チェックシートの活用し、毎週自身をふり返る機会があることで、子どもたちも意識して取り組むことができた。しかし、聴くときの姿勢や話すときの声の大きさには依然課題があり、改善に向けての取り組みが必要である。	（４） ・素晴らしい取り組み。今後も継続していただきたい。 ・具体的でわかりやすかった。 ・「聴き合う力」を身に着けることはとても良い事だと思います。特に子どものうちは自分の事を一方的に話すケースをよく見ますが、「聴く力」を身に着ける訓練は素晴らしい教育だと思います。	（６）年度初めにチェック項目をしっかりと確認し、全員で指導にあたる。子どもだけでなく、指導ができているか教員も定期的にチェックしていく。
		(7)全員が年間1回以上の授業公開を行う。	（７）今年度は自主的に授業を公開する教員も増え、互いに授業を参観し合い、授業改善につなげていくことができた。	（６） ・授業中は集中しているか。 ・初めのあいさつの時、授業を受ける心構えが出来ているか（準備をふくめ）。 ・授業中に鉛筆を削る等、勝手に席を立つことを禁じているか。 ・数値化？難しい問題ではあるが、個性の尊重も必要では。	（７）（８） 全体研修の本数は、人権部と相談して考えていく。（教科としては3本の研修を予定）授業を見る、見てもらうことをもっと日常化していく（参観習慣などを設ける）。
		(8)校内における研究授業（国語科）を年間3本、鈴教研委託の研究授業（国語科・生活単元）を全学年で実施する。外部講師や指導主事を招聘し、事後検討会を行い授業改善に活かす。	（８）研究授業等、計画通りに実施することができた。外部講師や指導主事の指導の下、研究を進めることができた。	（１０） ・外国ルーツの生徒の意見・要望等の聞き取りが必要では。	（１０）外国につながるのある児童だけ何かに組み込めるということは難しいが、全校で実施している昼読、図書時間にしっかりと組み込ませていく。 外国につながるのある児童の意見や要望等の聞き取りは大切である。日本語教室通級児童については、取り出し授業のときに聞き取りを行っていく。また、外国につながるのある児童の保護者の方にも家庭訪問やあゆみ渡しのときに要望等を聞いていきたい。
	補充学習の充実	(9)特別な支援を必要とする児童については、「個別的教育支援計画」を作成し、個々の特性に応じて学習を行う。個別学習を行う際は、仕切り板を使ったり掲示物を最小限にしたりすることで学習に集中できるような環境を整える。また、一斉授業の場合には、個別に声をかけるなどの支援を行う。	（９）「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」を基に、個々の特性に応じた学習を進めることができた。また、支援の必要な学年・児童に対しても校内で支援体制を組み、全職員で対応した。パーテーションや教室環境も整えることができた。		
		(10)外国にルーツがある児童の日本語力向上のため、「特別的教育課程」に基づき、児童の日本語の習熟度に合わせた取り出し授業や教室での支援を行う。また、連絡ノートで授業計画と授業での児童の学習の様子等を学級担任と日本語担当者で共有し、日本語力の向上とともに児童理解を深める。JSL児童のバンドスケール判定会議を複数の教員で協働して行い、児童の力を把握する。	(10)児童の日本語の習熟度に合わせてグループを分けたり、能力に合った教材や指導方法を工夫したりしたことで意欲を高めることができた。取り出し授業だけではなく、教室で学習する際に支援することで、学級での学習に意欲的に参加することができた。連絡ノートで、授業計画だけでなく授業の様子や児童の様子についても学級担任と日本語担当で共有できたことで児童理解を深めることにつながった。バンドスケール判定会議の際には、児童の力や様子を共有し、指導に生かすことができた。		
		(11)クロムブックを常に活用するために、1日1回ログイン100％	（１１）1・2年生は難しい。生活科で写真を撮るなどで活用している。4年生はクラスルームに予定をあげており、それを確認するためにログインしている。 3，4，5，6年 100パーセント。	・クロムブックの活用において持ち帰って自主学習に利用することが必要。 ・ICTの活用は今後は必須です。将来の為に今後も引き続きの利用を願います。	（１１）来年度も引き続き実施していく。
		(12)年に1回以上各教科と連携して授業実践を行う。（成果を教員で共有する）	（１２）国語科では、挿絵の並べ替え、登場人物のしたこと、言ったことを色分けしたりした。体育科で動画を撮影し、見合って動きの改善に繋がった。	（１２）クロムブックを各教科により、工夫して学習につなげているのはよいと思う。	（１２）継続していろんな教科で実践していく。
		(13)低学年は長期休み、中学年は月1回、高学年は週1回家庭学習のツールとしてクロムブックを持ち帰る。	（１３）全学年実施できた。必要に応じて持って帰る頻度がさらに増える学年もあった。5年生自主学習用（ドリルパーク、タイピングなど） 6年生毎日持って帰っている。個に応じて柔軟に対応している。	（１３）クロムブックを活用して、ドリルなどの自主学習ができるのは良いと思う。先生方が子どもたち一人ひとりのドリルの状況は確認できているのですか？	（１３）今後も自主学習にも取り入れていく。確認できます。
		(14)放課後スクール（年／8日間），夏休みの補充学習（2日間）を実施する。	（１４）低学年は金曜6限目、高学年は月曜6限目に実施した。日が前もって決まっているため、テスト前などタイムリーな指導には繋がりにくい。継続して実施していく。	（１４） ・放課後は時間をとるのが難しいと思うが、夏休み・冬休みの補充学習を増やすように検討できないのか？ ・充実した放課後スクールになれば、児童のやる気につながる等、色々なメリットが発生すると思われる。	・冬休みは日数が少ないため難しいが、夏休みの補充学習については、来年度職員全体で検討していく。 ・子どもたちが参加して良かったと思えるように、担当教職員の数や学習内容を考える。

評価項目		具体的な手立てと指標（R5年度）	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
Ⅲ 学力保障	読書活動の推進	(15)低学年は火曜日と木曜日の朝の時間に読書の時間を設ける。また、全学級昼食後(12:55～13:10)に読書をする時間を設けることで、本にふれる機会とする。 (16)国語科の教科書に出てくる文学教材に関わる本を選定し、学年の廊下に並べ、並行読書を行う。 (17)可能な範囲で読み聞かせを実施していく。本年度は6月から月に一回程度行っていく予定。	(15)絵本袋に本を入れておくことは有効で、いつも手元に本がある環境を整備することは重要である。低学年では、ペア活動の充実、連絡帳の記入に時間がかかるなど、朝読の時間確保が難しい。食べる早さに差があるものの、昼読しようとしていた。 (16)全学年実施できた。単元ごとに並行読書コーナーの本を入れ替えた。 (17)ボランティアさんがなかなか集まらず、実施できなかった。	・ICTの活用を図りながら読書活動の推進をするのは難しい面があるような気がします、どちらにも注力いただきたい。読書の習慣は児童期に身につけることが重要かと思います。 ・朝読の確保が難しい時もあるかと思いますが、継続していくことに意義があると思います。	(15) ・朝読昼読ともに継続して行っていく。子どもが興味をもてるように学級文庫や図書室の本を充実させていく。 (16) ・継続して行う。並行読書の本を言語活動に活かしていけるとよい。 (17) ・図書ボランティアが難しい場合は、委員会による読み聞かせも行っていく。
	キャリア教育	(18)夢工房などを各学年1回以上実施する。 (19)ゲストティーチャーを招いた学習を各学年1回以上行う。	(18)(19)1・3年生はアグリロマンさん、5年生とたんぼぼ学級は福祉協議会など各学年ゲストティーチャーを招いて学習しているが、夢工房を実施できなかった学年もある。	・夢工房は、普段の学習では知りえないことを学ぶチャンスなのでぜひとも今後も続けていってほしいと思います。	(18)(19) 夢工房・ゲストティーチャーは、来年度も各学年1回以上取り組めるようにする。
	ミブログ教ラ	(20)ICT支援員と連携を密にとり、各学年、年1回以上実施する。	(20)1年生～4年生は3学期にScratchを予定している。5年生は算数の授業で、6年生は理科の授業で取り組む予定である。		(20)今後もICT支援員と連携し、取り組んでいく。
Ⅳ 人権教育		(21)綴る（書く）活動やその綴りを思い出しなおし（推敲）することを通して自分自身やまわり（家庭、学級、学校、社会）を見つめさせる機会にする。外国につながるのある子や特別支援学級に在籍する子、綴ることに抵抗がある子など、目の前の子どもの実態に合わせて、個別に時間を設けるなど、綴らせ方を工夫し、すべての子どもの綴る活動が保障されるように手立てを取る。また、『ぬくぬくタイム』を設けることで、綴ったことを語り合う時間を充実させ、「互いの暮らしを知り合い、認め合う機会」「互いの思いや願いを聴き合う機会」とし、子どもたち同士をつなげていく。	(21)発達段階に応じて綴る活動を工夫したり、綴ることに抵抗がある児童も個別に時間を設けて綴らせたりすることで、自分の思いを学級で語る場面が増えた。「ぬくぬくタイム」を設けることで、友達の見方を新たにしたり、自分自身のことについて見つめなおしたりすることができた。一方で、思い出しなおしをするための時間をつくる難しさがある。家庭で綴ることも多いため、この取組を保護者にどのように周知して理解してもらうかが課題である。	(21) ・「ぬくぬくタイム」に期待します。 ・「ぬくぬくタイム」は良い企画だと思います。互いの思いや願いを聴き合うことは、お互いの子ども達間の理解を深める良いチャンスだと思います。	(21)ぬくぬくタイムがより充実していくことを目指して、綴る活動について、職員の理解を深めるような研修を企画していく。どのように「思い出しなおし」を行っていくとよいのか、また、まわり（主に家庭や社会について）を見つめる力を育んでいくために大切なことは何か、明らかにしていきたい。
		(22)6年間の人権教育カリキュラム（部落問題学習）をもとに、人権教育センター・解放センター・市民館など地域の施設にでかけたり、地域の人々と交流したりする。事前に打ち合わせを行い、教職員自身が出会いの魅力を感じるとともに、学年の実態に合わせて取組を工夫するなど目的意識をもつ。また取組後には子どもの具体的な姿から成果と課題を明らかにする。	(22)どの学年も人権教育センターや解放センターを訪問し、それぞれの発達段階に応じた学びをすることができた。6年間のカリキュラムを意識することで、部落問題学習につながる流れが定着してきたが、学んだことを地域の人々に発信するという点は課題が残った。	(22) ・地域の大人、父兄はどれだけ施設（教育センター、解放センター）を訪問、利用しているのか。一部の人、偏りがありはしないか。 ・人権教育センター、解放センターが、ここ数年でぐっと近しく思えるように私になりました。	(22)新型コロナウイルス感染症の前には1年生が親子で風作りをするという行事を行い、センターに保護者が足を運んでもらうことで地域の中にある施設を知っていくという行事を行っていた。今後、感染症の広がりが収まれば、行事を復活させていきたい。
		(23)「ぬくたいフェスタ」を、全校で人権教育を進めていく機会とする。ぬくフェス前の人権週間には各学年がぬくフェスに繋がる取組（あいさつ、メッセージカード、書く・綴るのさらなる取組み等）を行い、児童の人権意識を高める。	(23)今年も5年生を中心に、缶バッジ・ポスターの作成、「ぬくたい木」の取り組みを全校に発信し、各学年で取り組むことができた。今年度は、ぬくたいフェスタ後に人権週間を設け、それぞれの学年の人権学習での学びを模造紙で掲示した。各学級で見て回る時間をとったことで、他学年の学びを知り合うことができた。来年度も、担当から職員へぬくフェスの意義や価値を伝えて地域の行事として大切にしていきたい。	(23) ・ぬくフェスを知らない教員がないようにしてほしい。 ・感想を1つ上の学年に向けて書いたことは来年度につながるよい方法だと思う。	(23)ぬくフェス担当から、ぬくフェスの意義や価値、これまで大切にされてきた行事であることを伝えていく。特に新しく転任してきた教職員には参加を呼びかけていく。また、担当や5年生を中心に発信を進めて、全校・全教職員で取り組みができるようにしていく。
		(24)多文化共生教育を行う。特に4年生で重点的に学習し、学んだことを学校集会で発表することで、学校全体で共有していく。また、「多文化共生社会の実現に向けて活動する方」と連携を図り、出会い授業を計画・実施していく。 放送委員による毎日の朝と帰りの挨拶や、運動会でプログラムのアナウンスを多言語で行う。また各学級で朝・帰りの会等でスペイン語・ポルトガル語・英語の簡単な挨拶を取り入れる。	(24)今年度の4年生では、学級に在籍する「外国につながるのある児童」のルーツである国についての調べ学習を行った。多文化共生社会の実現に向けて活動する人との出会い学習を中心に進め、出会った人の願いも知ることができた。学習を通して、周りの児童の外国に対する肯定的な見方・考え方を育むことによって、外国につながるのある児童の自尊感情を高めることができた。また、「外国につながるがある児童」とかかわりをもとうとする児童が増えてきている。一方で、学習後も「外国につながるのある児童」に対して厳しい見方をする児童もいることが課題である。各学級で多言語での簡単な挨拶を取り入れることについては、取り組みにバラつきがでてしまった。また、日本語教室では、教室前のろうかに通級する子どもの自己紹介（目標）を掲示することで学習に励む子どもたちの周知に努めた。	(24) ・多文化共生の意識を高めたいと思う。 ・人間としてお互いに思いやる心が大切。他市・他県の状況も確認してはどうか。 ・外国につながるがある児童は、日本の子ども達よえい、柔軟に考え方、行動の違いを受け入れる気がします。逆に日本はきょうくつかと。お互いに考え方、行動の自由を受け入れられる人に成長できるよう祈っています。	(24)来年度も多文化共生教育を系統的に学習していく。特に4年生で重点的に学習する。出会い学習についても児童の実態に合わせて行っていきたい。 他市・他県の状況を確認する機会があるか未定だが、他校（鈴鹿市内）の取組を知る機会が毎年あるため、取組を確認して生かせることは生かしていきたい。
		(25)保護者に人権教育（道徳）の授業を、全学年が授業参観またはホームページ、学年通信等で発信する。	(25)一年を通して、人権教育を行ってきた。授業を公開できた学年もあったが、感染症の影響もあって、2学期の授業参観が中止になり、公開が出来なかった学年もある。代わりに取り組みの内容を校内に掲示する期間を伸ばした。また、通信で各家庭に発信したり、ホームページに載せたりする学年もあったが、学年によって頻度に差が見られた。		(25) 本校としての取り組みの成果を、年に一度は授業参観やホームページにて公開できるようにする。また、可能な限り学級だより等でも発信したい。
		(26)人権教育に係る研修会を年間4回以上開催し、教職員の人権感覚の向上を図る。また、校外で行われる研修会についても周知して参加を促す。また、校内における研究授業（人権総合）を年間3回実施する。指導主事を招聘し、事後検討会を行い授業改善に活かす。	(26)今年度は人権教育に係る研修会を計4回行った。レポート研修のあり方をはじめ、子どもをどう捉えたらよいか、核になる子のレポートをどういった視点で書けばよいかなどを学んだ。研究授業は3回実施し、今年度もつづる活動を中心とした授業を行った。つづり方についての研修があると、教職員の共通認識も高まるのではないか。		(26) 研修の内容は、来年度の方方向性を考慮して込めていく必要があるが、早期から研修を実施し教職員の共通認識を高める。

評価項目		具体的な手立てと指標（R５年度）	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
Ⅴ 生活指導		(27)「日本一あいさつができる学校」に向けた取り組みを行う。 ・「いつでも・誰にでも・いろいろな」あいさつができるようにするために、児童会、代表委員会が中心となってあいさつ運動や取り組みをおこなう。 ・教師が率先してあいさつをする。 ・各クラスであいさつの指導を徹底する。 ・児童会での去年からの取り組みを継続する。（あいさつ運動、いいあいさつをした子の紹介） ・児童アンケートで「まいにちあいさつすんでしていますか」という質問に対して、「している」または「だいたいしている」と回答する児童が全体の９０％以上になることをめざす。	（２７） ・児童会が昼に放送してくれている取り組みは子どもたちのモチベーションが上がり良いが、仲の良い子ども同士で紹介しあうこともあるため、形を変えるなど検討が必要。 ・昨年度のアンケートでは、「あいさつをしている」「だいたいしている」子どもの割合が８７．４％だったが、今年度は７９．５％に減ってしまった。原因を探る必要がある。 ・ただあいさつをするだけでなく、あいさつの大切さや目的などを教師が価値づけることで、子どもたちの内面も育てていく必要がある。	（２７） ・子どもの問題は私たち大人の問題。地域がよくなれば、子どもに良い結果をもたらす。その第一があいさつ。安心・安全は平素のふれあい。 ・あいさつをしている子の数値がへっているが、日常生活をしている中で、一ノ宮小学校の子は気持ちよくあいさつを返してくれる子が多い。地域住民としても、あいさつをつづけていきたい。 ・学校でのあいさつ運動では元気よくあいさつができる児童は増えてきていると思われるが、それ以外の児童が多い。当地域での団集合時の状況では進んであいさつできる児童は皆無。 ・近所の小学生たちは向こうからあいさつしてくれたり、私からするとほぼ返してくれます。“あいさつできる学校”定着していると思います。	（２７） ・日本一あいさつができる学校を目指す取り組みは来年度も継続していく。 ・児童会中心にあいさつ運動、あいさつBOX、給食の放送であいさつを紹介するなど来年度も取り組んでいくが、取り組み方を変えていく必要がある。あいさつBOXや給食の放送であいさつを紹介する取り組みは、仲の良い子どもを紹介したり、決まった子どもばかりが紹介したりとマンネリ化してきているため、取り組みが学校全体に広がっていくようにしていきたい。
		(28)校内生活規律の定着のための取り組みを行う。 ・学期に２回の持ち物チェック（昨年度と内容を変更する） ・生活委員会を中心とした廊下右側歩行運動の実施 ・生活委員会を中心とした校内パトロールの実施	（２８） ・教師による声掛けや指導は継続して行っているが、廊下を走る子どもはなかなか減らない。廊下を走らないように声をかけてくれる子どももいた。 ・持ち物チェックは、生活チェックシートに変更し、週１回の頻度で行ったが、低学年は週１回は難しかった。 ・持ち物チェックシートはチェックしっぱなしにならないように振り返りをするなど工夫が必要。		（２８） ・生活チェックシートは、来年度も継続して取り組んでいく。取り組む際には振り返る時間を作るなど、やりっぱなしにならないようにする。
		(29)学期に1回いじめアンケートを実施したり、部会等で学年の様子を月に1回以上交流し、事案に対して連携をとって適切に対応する。	（２９） ・報告書で細かく報告をしてもらっているので連携がとりやすかった。 ・学年間でも情報共有ができた。 ・職員会議で子どもの様子を共有したので、様子がよく分かった。情報共有に時間がかかるため、共有の仕方を工夫すると良い。	（２９） ・いじめアンケートの内容は？	（２９） 些細なことでも報告し、情報を共有できるようにしていきたい。情報共有は打ち合わせ、職員会議を利用する。
Ⅵ 長欠減少		(30)家庭訪問や電話連絡で保護者への連絡に努めるとともに、専門機関との情報共有を通して、多面的な視点から長期欠席となる要因の把握に努める。 (31)校内でケース会議を開催し、ＳＣやＳＬＳからの助言も参考にしながら、組織的に児童一人ひとりの状況に応じた登校支援を行う。また、各中学校区で開催される「不登校支援担当者会」での情報共有や学びを登校支援に反映させる。 (32)支援策決定後に児童の出欠状況や校内での姿を検証軸にして、必要に応じた支援策の再検討を行う。 (33)１０日以上欠席者を、昨年度より１０％減らす【昨年度 ９０名】。	(30)(31)(32)毎朝、学校に連絡がない形での欠席については、電話連絡等により理由の把握に努めており、毎月の職員会議にて長期欠席児童の状況等を共有している。欠席の背景にある要因について検討し、家庭の状況を踏まえてＳＳＷとともに家庭訪問をし、保護者に働きかけを行うことで、状況の改善につなげることもできた。また、登校してくる児童を地域の方が温かく迎えていただいており、児童の表情の変化等を学校に伝えてもらうことで、不登校の未然防止につなげることができた。必要に応じてケース会議を開催し、ＳＬＳやＳＣからの視点を含めた多面的な視点から、長期欠席の要因を探ったり、登校支援等の検討を行ってきた。 (33)出席停止を除いた10日以上欠席者は12月末で70名となり、昨年度より増加している。学習に対する困り感や友達関係での悩みを抱えているのではないかと注視していくとともに、今後不登校の未然防止、早期発見に向けた取組をしていくことが必要であると考える。	（３０）（３１）（３２） ・学校内に「ほっとルーム」が設置されたことにより、学校に行ける日も少し多くなった子もおり、よかったと思う、しかし、まだ家から出られない子もいると思うので、そのような子に対しての手立てを早急に行い、少しでも家から出て、関係機関へつなげてほしい。私たち地域で、できることは連携していきたいと思う。 ・不登校支援のほっとルームが開設され、利用されているとの事ですが、保護者向けの支援はありますか。本人はもちろん辛い思いをしていると思いますが、保護者の方も大変な思いをされていると思い気になりました。	(30)毎朝、学校に連絡がきていない欠席児童に対して確認の電話連絡を入れているが、来年度の「学校だより」にて保護者に欠席連絡が必要なことを周知する必要がある。 (31)来年度から中学校に進学する卒業生について、30日以上欠席児童はもちろんのこと、10日以上欠席者や遅刻・早退の多い児童についても、丁寧に中学校への引き継ぎを行い、不登校の未然防止に努めたい。 (32)長期欠席児童の状況について、職員会議にて共通理解を図るための時間を設けていく。 (31)(32)(33)長期欠席児童の保護者への働きかけについて、SCやSLS、SSWとの連携を図りながら取組を考える必要がある。
	と①情報校発信協議会	(34)授業参観を含めた学校運営協議会を年6回行い、熟議を行う。 (35)家庭訪問、電話連絡、たよりの発行、ホームページの更新等により学校の教育活動の趣旨を伝えているとのアンケート項目に、肯定的な回答８５％以上をめざす。	(34)授業参観はインフルエンザの流行のため行われなかった。中学校区学校運営協議会を含めて6回行った。 (35)肯定的回答は８２％。学校だより、学校ホームページについては、発行数や更新時期に改善の余地あり。	・学校運営委員の構成メンバーとしてPTAの役員さんも入っていただいておりますが、大半が年配者であり、もう少し若い人員を増やせばより実情に即した意見や要望が出るように思います。 （３４）学校運営協議会では、学校の様子を多く発信して頂きたい。「学校便り」も配布してほしい。	（３４）毎回の運営協議会で、学校だより等をもとに委員に学校の様子を伝えていく。
	Ⅶ 地域連携	ン②学校ア支の援活ボ用ラ	(36)登録者数は26人。活動していただいた方は18人。今年度、図書館整備あるいは学習支援のボランティアで4人の新規登録があった。	（３６） ・ボランティア登録者数増加の工夫はないだろうか。 ・登録者に対しては、いろいろな分野での参加を要請して活動の活発化を目指してはどうか。	（３６）複数の学年で、学習単元を限定してお手伝いを募集したら応募があったので、その方々にボランティア登録を積極的に勧めていく。
	③安全安心	(37)避難訓練、一斉下校へ地域の方に参加していただく。 (38)児童、保護者への自転車ヘルメット着用の働きかけを行い、着用率８５％以上をめざす。 交通安全教室の日に、全校児童にヘルメットを持ってこさせ、正しく着用できるかチェックする。	（３７） ・一斉下校の時に、一ノ宮地域づくり協議会の方に参加していただき助かった。 （３８） ・今年度、ヘルメットの着用率は８９．４％だった。 ・声掛けはその都度行っている。保護者への呼びかけも必要。 ・ヘルメットを持つてくることは今年度できなかった。	（３８）地域の中で見ているとヘルメット着用している子は増えてきている。	（３８）交通安全教室などで、ヘルメット着用を呼びかけるとともに、ヘルメットを着用しているかのアンケートにも取り組む。